



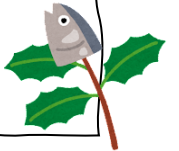
節分と鬼

来る2月3日は節分です。皆さんは節分にどのようなイメージをお持ちでしょうか。
“豆まき” “柊翹(ひいらぎいわし)を飾る” “恵方巻を食べる”などがあげられるかと思います。
一方“鬼が子どもを怖がらせる”というマイナスなイメージを持っている方もいるかもしれません。
本来の節分とはどのような行事なのでしょう。

節分という言葉には、「季節を分ける」という意味があり、昔の日本では、春は一年のはじまりとされ、特に大切にされてきました。

そのため、春が始まる前の日、つまり冬と春を分ける日だけを節分と呼ぶようになったそうです。暦の上で春が始まる日を「立春(りっしゅん)」(2月4日ごろ)と呼びます。

鬼は「悪いもの」を具現化したものとして表現され、豆は「魔」を「滅」するものと例えられたため、鬼に豆を投げるようになりました。また、「柊翹」はただの飾りではなく、節分の鬼が嫌いな葉っぱである、尖ったトゲのあるひいらぎと、鬼が嫌がる臭いのいわしを組み合わせることで「鬼が家に入って来ないように」という魔除けの意味があります。



本来はこのような意味合いを持つ節分の行事ですが“鬼が子どもを怖がらせる”というイメージが独り歩きすることで、昨今世間をにぎわしている“虐待”に関するニュースと関連付けて『鬼で子どもを怖がらせるのは虐待ではないか?』という意見も出てくるのではないかと思います。

『鬼が子どもを怖がらせる』で有名な秋田の“なまはげ”ですが、秋田の子どもにとっては恐怖の象徴です。

“なまはげ”は「なぐ子はいねがー」「悪い子はいねがー」と言って家々を回ります。

そのセリフには、さまざまな説がありますが、教育や躾の意味が入っています。

怯えた子どもを親が庇うと、なまはげはそれ以上のことはしてきません。

その姿を見て子どもは親を尊敬し、家族の団結に繋がると言われています。

【なまはげが来る】ことが教育の一環になっているのです。

上記のような考え方もある中で、園ではこれまで日本の文化を伝える大事な行事の一つとして、豆まきをおこない、節分の絵本を通して鬼の話をしたり、本物の柊翹(ひいらぎいわし)を紹介して子ども達に知らせてきました。

厄除けの行事としての意味を知ることが、節分会を園でする意義だと考えています。

2月3日が“鬼が怖い日”ではなく、本来の想いから外れないように今年も子ども達と健やかな一年が送れるように節分会を楽しみたいと思います。

(我妻)

